國學院大學学術情報リポジトリ

# 古記録読みの対話と格闘



| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2025-02-27<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 髙橋, 秀樹<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.57529/0002001375 |

【巻頭言】

# 古記録読みの対話と格闘

髙橋秀樹（本学准教授）

日本中世史の分野には、さまざまな質の史料集がある。既刊の活字本を切り貼りしただけの自治体史の史料編、文書史料をとりあえず網羅的に活字化することを目指した『平安遺文』『鎌倉遺文』（以上、東京堂出版）のような文書集、底本がもつ改行などの書式の情報にはかかわりなく文字を詰め込み、時として文字そのものを「意により改む」として改変してしまう『新訂増補国史大系』（吉川弘文館）、史料原本の公開が限られていた上に、組版の技術にも限界があった戦前の『史料通覧』のほぼ再版である『増補史料大成』（臨川書店）など、現在の中世史料論のレベルからすると、そのままの利用がためらわれる史料集が今なお広く用いられている。一方で、東京大学史料編纂所の『大日本古記録』（岩波書店）や、『史料纂集』（八木書店）のように、底本の選定からこだわり、諸本を校合した上で校訂注を付し、人名や地名には説明注を施して、さらに上部欄外に記事内容を摘要した「標出」を加えているという手の込んだ史料集や、『新横須賀市史』（横須賀市）のように、可能な限り原本やその紙焼き写真から史料を採録し、史料ごとに解説を施した自治体史もある。

私も、平成十四年の『新訂吉記』（和泉書院、全四冊）刊行以来、『史料纂集　勘仲記』（八木書店、既刊五冊）、『新訂吾妻鏡』（和泉書院、既刊三冊）と、三種類の史料集を編纂・刊行してきた。『勘仲記』は既刊シリーズの中での刊行

であるから、組版や用字などに制約があるが、独自に刊行している『新訂吉記』や『新訂吾妻鏡』は、『大日本古記録』や『史料纂集』に倣いつつも、利用しやすくて便利な史料集を目指した独自の工夫を随所に加えている。

幸いにも、学習院大学・同大学院在学中には、史料編纂所や宮内庁書陵部で記録類の編纂に従事してきた「記録読み」の大家の先生方の演習がいくつもあって、多くを学ぶことができたし、私自身も史料編纂所の研究員として『大日本古記録』の編纂に関わった。また、国立歴史民俗博物館では田中穣氏旧蔵典籍古文書の原本調査に従事して、史料原本の持つモノとしての情報量の多さに気付くことができた。こうした経験が今の史料集作りにも活きている。

貴族の日記である古記録には、記主の職務を中心とする諸活動や多様な情報が書き残されている。儀礼の故実、宗教・文芸・芸能・天文に関する内容、中国の古典を踏まえた表現など、貴族たちの「知」そのものが詰まっていると言っていい。したがって、古記録の内容を理解するには、記主の感性や思考回路を理解し、彼らと「知」を共有することが本来は不可欠である。もちろん、そう簡単にできることではないが、それを目指した努力は必要だろう。

では、どんな努力が必要なのか。まずは、ひとつの日記の一年分以上の記事を通して読むこと。一通りの年中行事が出てくる一年分の記事を読むことで、彼らの一年間の生活サイクルを知り、およその記主の行動パターンや交友関係等も踏まえることができる。適切な解釈を導くためには、ある程度の分量を読んで、記主の文章スタイルや論法、用語法を理解する必要もある。逆に、論文を書くために必要な部分だけを拾って読むような読み方は好ましくない。研究者の注目を浴びる記事というのは、その日記の中でひときわ異彩を放っている記事であることが多い。記主の通常の書きぶりを知らないままでは、その記事の位置づけを見誤ってしまうことになりかねないのである。なお、古記録の解釈には、既存の辞典類の語釈が役に立たないことも少なくない。それは『日本国語大辞典』（小学館）に代表される辞典類が古記録からの用例をほとんど採っていないからである。いくつかの研究機関が公開している古記録の全文データベースなどを利用して用例を集めた上で、その時代、その日記に応じた語釈を自分で考える必要がある。

二つ目は、頭の中で記事を再現映像化してみること。映像が止まってしまうようでは、おそらく記事内容が適確に理解できていない。映像化するためには、日頃から絵巻物や装束類・建築物の写真などのビジュアル資料、儀式・祭祀等の再現映像などに接している必要がある。登場人物の地位や年齢などの情報も確認して欲しい。年寄りという印象がある大臣クラスの人物が、実は三〇代だということも少なくない。

三つ目は、私たちの知識が彼らの「知」全体に及ぶべくもないことを前提として、せめて、それを調べるためのツール（工具書・参考文献）についての知識くらいは持っておくこと。儀式書・故実書は言うまでもなく、仏教書や陰陽道書、古天文学に関する参考書、中国古典の工具書・データベースについても知っていて欲しい。

古記録読みは、記主との対話である。日記に書かれた文字列や文字列以外の情報をどれだけ読み取ることができるかは、読み手に能力にかかっている。自筆日記ともなれば、墨継ぎや微妙に空いた文字間隔から記主の息づかいを感じ取ることもできる。それは、句読点が用いられていない時代に、記主がどこで文章を区切っているかを知る手立てになるから、解釈の適切さにもつながり、記主が一筆で書いている途中に読点を打ってしまうような誤りは避けられる。文字の大きさはほとんど変わらないように見えても、文字列の中心軸を外してやや右に寄せて書いていれば、注記のつもりで書いているとわかる。塗りつぶしたり、挿入符を用いたりしている修正箇所、後日に異なる墨色や小さめの字で書き加えている文字からは、情報入手の時間的経緯や違いもわかる。それを読み取ることができるか否かは読み手の感度次第である。自筆本でなくとも、「なぜ、こんな表現をしたの?」「ここに限ってこの字を使ったのはなぜ?」そんな対話を記主と交わす心持ちで読みたい。インタビュアーに予備知識がないと、話し手からうまく情報を引き出すことができず、言葉遣いや表情に秘められた意味を情報として感知する能力がなくては真意が掴めないのと同じで、史料読みにも「聞く力」が必要なのだ。古記録の記主を雄弁にさせるのも無口にさせるのも「聞き手」次第である。

一方、古記録読みは、闘いでもある。闘う相手は記主ではない。写本の書写者や活字本の編者・校訂者、あるいはそ

の記事の解釈を示している先学が闘いの相手である。誤写していないか、誤読していないか、読点を打ち間違えていないか、常に疑ってかかる必要がある。複数の活字本がある場合には見比べるのが必須であるが、新しい本の校訂者が旧本の読みに違和感を持ちながらも、それに変わる成案がないために、手をつけずにそのまま残してしまうことも少なくない。書写者や校訂者と闘うためには、より質の高い写本、あるいは複数の写本との校合作業や他の記録も含めた用語法の検討が不可欠である。

古記録を史料として用いている研究者でも、古記録の常識やこの時代の人々の感覚や感性を理解しないまま解釈している人が少なくない。例えば、古記録では自発の意味で使われることも多い助動詞の「可」（べし）を単純に命令の意味で解釈してしまい、省略されている主語を取り違えていることがある。名詞と動詞だけを拾っていくような、ざっくりとした解釈を提示する人もいるが、接続詞は文章構造や論理展開を理解する上で重要であるし、助動詞や副詞の意味に留意しないと、記主が伝えたがっている微妙なニュアンスは伝わってこない。「一月二月之間」を「正月・二月の期間」と解釈している論文に接したことがあったが、この時代に正月を「一月」と表記することはあり得ない。また、源頼朝が「大将軍」を望んだことを記す記事について、曾祖父頼義の称「将軍」を超えようという意識が頼朝にあったという解釈などは、先祖はその例を追うべき存在であって、決して超えたいと望む対象ではないというこの時代の意識や感性を理解していない故の誤解である。独善的な解釈に陥らないためには、ゼミや研究会などの場で、参加者がそれぞれの知識を持ち寄り、議論を闘わせながら史料を読み、知識を増やすとともに、感性を磨くことが重要である。

恩師からの教訓「人の仕事は疑ってかかれ」は、私の基本的な学問姿勢になっているが、それとともに、史料は、記主を始め、その時代の人びとの文体・語感、感性や意識の中で、まず解釈し、それを前提に、現代の研究者としての目や感覚で取り扱わなくてはいけないというのが、さまざまな古記録との対話や格闘を経て到達した今の認識である。